弱者の表象に関する一考察

――ミンハの表象から考える――

森　美智代

0. はじめに

トリン・T・ミンハは、姜尚中編（二〇〇一）『ポストコロニアリズム』の中で、エドワード・W・サイード、ガヤトリ・C・スピバック等と並んで紹介されるポストコロニアリズムの代表的な論者である。ポストコロニアリズムが問題とする領域は一つではないが、中でも私はマイノリティ、ジェンダー、他者といった、弱者に関わる問題について、国語教育の問題と深く関わる問題として関心を持っている。

弱者に関わる問題に関心を持ちながら、ここでミンハを取り上げるのは、ミンハの論に私が強く影響を受けたからというのではない。むしろ、弱者が弱者として語る方法を模索するミンハの試みに対し、強い違和感を感じたからである。

ここでは、ミンハの試みに対する違和感を説明し、弱者の表象について考えることの有効性を探ってみたい。

一. 問題の所在

弱者に関わる問題は、国語教育における諸問題と深い関わりを持っている。例えば、男性に対する女性、管理職に対する平教諭、教師に対する学習者、いじめっこに対するいじめられっこ、助言者に対する悩める者、聴衆に対する告白する人…のように、弱者という位置を変えることが難しいものから、弱者であると規定することができないものまで、さまざまに存在する。これらすべてを包括して論じることには限界があるにせよ、弱者という視点でとらえて考察することが有効である事例は数多く思い当たる。

もっと具体的に、例えば教師―学習者の関係を弱者という視点からとらえると、弱者である学習者が強者である教師に何とか思いを伝えるためには、どのようにしてことば（ノンバーバルを含む）にしたらよいのか。これは、弱者の表象に関する問題である。弱者は、弱者であることを伝えることができないからこそ弱者と呼ばれる存在である。もっといえば、学習者にはどうしても伝えることができ

ないことがある。それに気づくことが、学習者が弱者であることに気づくことであり、それをいかにして伝えるのかを考えることが、弱者の表象について問題とすることになる。

また、ある授業が研究発表、実践の提言、理論を説明するための具体例…としてことば化（表象化）されることを、弱者の表象という視点からとらえてみるとどうだろうか。その実践の記述が、実践者以外の者によってなされるならば、記述者—実践者間には強者—弱者の関係が生じるだろう。そうでなくても、教師が、実践者として学習者を記述するとき、実践者（記述者）—学習者間に強者—弱者の関係が生じる。実践者という弱者、学習者という弱者が伝えることができないところを、強者である記述者が表象化するのである。

強者—弱者の関係は、権力構造として単純に否定できるものではなく、弱者にできないことを実現していくための支援者としての強者が存在する。この場合それは、弱者の代弁をしてくれる強者である。

しかし、強者による代弁は、多かれ少なかれ、切り取られて、ねじ曲げられてなされるであろう。強者は、強者に理解できるようにしか代弁できないし、むしろ強者のルールの中で通用するように代弁しなければ、伝えられないのである。

一方で、弱者自身が、弱者でありながら伝えようとする試みがある。

弱者自身が語ることが、もしも実現できるならば、強者—弱者の構造が解体され、両者にとってより有益な関係性を築いていくことが可能になるであろう。また、関係性の変容だけでなく、もののとらえ方、考え方までも変えていくことができるかもしれない。

ミンハの試みとは、弱者自身が「弱者というのはこういうものなんだ」と伝えることを模索したものである。

二、表象化を問題とする（岡真理の場合）

弱者の思いを、強者のことばで表象するのではなく、弱者のことばで表象することが、そもそも可能なのか。

岡真理（一九九九）は、西洋人女性（西洋社会における弱者）がオリエントの女性を前にしたとき、女という弱者の立場で彼女の前に立つよりも、「西洋人的主体」というオリエントに対する強者という立場で彼女を前にするのだということをモンタギューの「トルコ大使館書簡」（西洋人女性がオリエントの女性について記述した）を用いて次のように説明している。

> オリエントの女性たちを前にした西洋人女性たちは、西洋人男性の視点に同一化し、窃視症的は主体として、男性の眼差しで彼女たちを観察し、オリエントに関する知の代補を提供することによって、西洋における同一性／自己を確立する。（中略＝引用者）西洋人男性にとっての西洋人女性がそうであるように。（岡九七頁）

西洋人女性は、女性という弱者でありながら、オリエントの女性を前にしたとき、「西洋人的主体」（岡九七頁）というアイデンティティ

を確立するために、オリエント女性に女性（弱者）性を付与し、自分自身を男性（強者）として再定義する。無意識であるにせよ、してしまうのだという。「西洋人的主体」としての自己のアイデンティティを確立するために、西洋人男性の視点に同一化させてしまう。別の視点から言えば、西洋人男性の視点に同一化してオリエントの女性を見ていたということは、西洋人女性が、「西洋人的主体」であることを確立しようとしていたことの現れであるといえる。

ここに示されているのは、弱者が、弱者としてあることの難しさであり、また、弱者を表象することが、他の弱者にとっても難しいということである。オリエントという民族であるという弱者の痛みを前にして、女であるという弱者の痛みですら分有することができない。ここでなされていたのは痛みの分有ではなく、西洋人という強者のアイデンティティの確立なのである。

岡では、エルサレムで出会ったパレスチナ人女性について、女性であること、パレスチナ人であることが岡自身によって語られている。エルサレムで出会った、そのパレスチナ人女性を表象することについて、岡は次のように述べている。

> ここで私は、私とパレスチナ人女性との差異を、共に女であるという同一性を通じて語っている。同一性を通じて差異を生産するという言説戦略こそ、モンタギューの主権をもった主体、イェーエンオールによれば、オリエンタリスト的主体の構築に用いられた戦略であった。だとすれば、私がしたことは、自分がオリエンタリスト的フェミニストにほかならないことを自ら証明してみせた、ということなのだろうか？（岡一〇二頁）

ここで岡は、自分自身の行った表象化を自問している。自分自身が行った表象化が、エルサレムで出会った彼女の痛みを分有することをねらいとする以前に、自分自身が、オリエンタリスト的フェミニストであることの証明であった可能性を指摘している。パレスチナ人女性の表象化が、オリエンタリスト的フェミニストとしてのアイデンティティの確立のもとになされた表象化であることを自問しているのである。

岡が示すように、エルサレムで出会ったその女性を、女として表象することも、パレスチナ人として表象することも、「言説的暴力」（岡一〇二頁）であるだろう。表象はつねに、彼女自身とはズレてしまうからである。「彼女の被っているものが、誤った名のもとでしか、そして言説的な暴力の行使によってしか表象され得ない」（岡一〇三頁）ことこそが、表象化が孕んでいる問題である。

しかし、私が注目したいのは、岡が問題としているのは、表象が「正しく」されないことではなく、「私が彼女について語ることで何が交渉されているのかを問うこと」（岡一〇三頁）であるという点である。表象化されたところを問題とするというのは、彼女について語ることによって、私が何をしていたのか、しようとしていたのかというところを問うていくことである。

三．神話作用への着目（レイ・チョウの主張）

エルサレムで出会ったその女性について語ることによって、岡自身が何をしていたのかという視点と同じ視点が、レイ・チョウの主張からも読み取ることができる。レイ・チョウが用いるのは、ロラン・バルトが「神話作用」という用語で理論化した概念である。レイ・チョウが引用したバルトによる神話作用の一例は次のようなものである。

わたしはフランスの高等中学の五級生（中等教育第二年次、十二歳）である。ラテン語の文法教科書を開いて、イソップかパエドラかから引用された文を読み取る。Quia ego nominor leo. わたしはそこでやめて考える。この文章には両義性がある。一方では、単語ならびが全く簡単な意味を持っている。なぜならわしはライオンという名だ。そして他方では、その文はわたしにとって明らかに他のことを意味している。五級生であるわたしに呼びかけている限りにおいて、それは明白にこのように言っているのだ。—わしは文法の例文で、属詞の一致の規則を明らかにするためのものだ。その文章が全然その意味をわたしに対して意味していないとさえいわなければならない。ライオンのことも、ライオンが自分をどう呼ぶかについても、わたしに話す気はあまりないのだ。その底にある背後の意味は、属詞の一致とかいうものの存在を、わたしに押しつけることにあるのだ。

（ロラン・バルト一四九頁、強調は原文）

バルトの「神話作用」とは、ここでは、「わしは文法の例文で」以下に続く部分の働きであるととらえられる。つまり、ライオンのことではなく、属詞の一致とかいうものの存在を押しつけてくるのが、「神話作用」であるととれる。

レイ・チョウは、張藝謀の映画（中国における後進性を描写する新たな民族誌として位置づけ可能な作品群）を分析する中で、張における「神話作用」を指摘している。張映画の民族誌的細部は、それら自身を意味するだけのためにそこにあるのではなく、バルトのいう「神話作用」のためにそこにあるのだという。すなわち、張映画の民族誌的細部は、それが意味する民族誌的細部（傲慢な年配男性像、拘束された女性像）のためにあるのではなく、「私は一つの民族誌的細部である。私は封建中国である」と意味するために、そこにあるのだというのである。

岡は、エルサレムで出会った女性について語るとき、その語りが明示的に意味している女性性やパレスチナ人であるところに目を向けるよりも、その女性を語ることによって岡自身が何を語ろうとしたのかを問題とした。「私（岡）はオリエンタリスト的フェミニストである」と意味するために、エルサレムで出会った女性を語ったのだとも述べていた。

同じようにレイ・チョウは、張の映画（張の民族誌）から、「私は一つの民族誌的細部である。私は封建中国である」という「神話作用」を見いだしている。そして、張映画の新しさについて、「過

去の時間を超えた中国表象」（レイ・チョウ二二〇頁）である点を挙げている。

張が、その神話的構築のなかで成し遂げるのは、「本当にあんな風だった」中国の反映ではなく、懐かしく、想像的に提示される、現在から見た過去の中国であるとレイ・チョウはとらえる。なぜなら、張は中国の「ネイティヴ」だからである。民族学者が、自分とは別の民族の民族誌を書くのとは異なり、「ネイティヴ」によってなされる文化的差異の意識化は、過剰で馬鹿げた儀式や習慣の形式をいわばメロドラマ化して描き出すというのである。

こうして張の映画は、

> 故国を離れた人々が抱く夢のような「故国」への憧れを満たすと同時に、観客すべてを一種の移民に変えてしまう可能性を実現するものとなるのである。（レイ・チョウ二二〇頁）

張の映画を観ている観客は、映画を観ることによっていわば、新たに中国へと移民してきた中国の新しい住民となる。移民（観客）にとって中国は、自分自身の国となる。しかし、過去の中国、張映画によって描かれる封建中国は、移民にとっては手の届かない中国なのである。

四．トリン・T・ミンハの試み

弱者を、弱者として「正しく」表象するのではなく、独特の言葉、語り、映像によって想像させるやりかたで表象しようとしたのがトリン・T・ミンハである。太田好信（一九九九）は対談の中で、ヴィクトル・モンテホという人類学者を取り上げ、モンテホとミンハとを同じ主張をしているものとして位置づけている。

> かれ（モンテホ＝引用者注）は、こういいます。人類学者というのは欠点を持っている。それは先住民の人たちの主張にまったく耳を貸さないことだ。先住民の人達（ママ）の声を聞くといっておいて、その代わりにマヤの文化についてのイメージを押しつけたり、代弁するようなことをやっている。つまりそれはモノローグだと言うんです。対話的にはなっていない。トリン・ミンハもモンテホと同じことを主張しています。（太田四九頁）

人類学者が、先住民という弱者の声を聞くといいながら、強者である自分たちの言語で記録していることに否定的な立場を取ることから、太田は、モンテホとミンハとの共通点を見ている。モンテホは、そのように「耳を貸さない」強者の語りを、モノローグであると言及しているのである。

では、ミンハは、どのように「弱者」の声を表象しているのだろうか。

ミンハ（一九九五）は、第一章「無限に映し合う『書きもの』の鏡の箱からの社会参与（コミットメント）」の最初の断章「三重拘束（トリプル・バインド）」の冒頭を次のように始めている。

ブラック／レッド／イエロウでもなく、女でもなく、ただ詩人、作家というだけ。一番大切なレッテルは何かという問題は、私たちほとんどの人間にとって、いまだに非常に重要なものだ。単に「作家」とだけ言った方が、「物を書く有色人の女」と言うより、ずっと重要な地位を与えられるのはまちがいない。文壇の大御所はいつも創作行為に人種と性を持ち込んで、非主流の女の作家の業績を低くみなして馬鹿にしてきた。（略＝引用者）（ミンハ九頁）

冒頭の段落は、ここで終わらない。この断章は一段落で二ページにわたり続いている。その間、ここで示されている「詩人、作家」が誰であるのか、説明するくだりはない。しかし、「トリプル・バインド」という題名から、この「詩人、作家」が、「書く者」と「女」と「有色人」を伴う「トリプル・バインド」であると予測され、すべてにあてはまる著者ミンハ自身のことを語っているのだと推測できるだろう。

つまり、この冒頭は、「トリプル」に弱者である著者ミンハが、弱者の痛みについて自ら語っていると推測できるのである。

しかし、この推測はわずか九行目で壊されてしまう。

書くことは、主体と歴史が交錯する地点でなされる行為だと――つまり、特定の（言語上、イデオロギー上の）知を包含するのが文学的行為だと――いうことから目を背けることも、最近では難しい。したがって、一方で彼女は、たとえどんな立場を取るつもりでいても、遅かれ早かれ、次の三つの相矛盾するアイデンティティのうちの一つを選ばざるをえなくなる。有色人の作家か、女の作家か、有色人の女かである。（ミンハ一〇頁）

「トリプル」が、「作家」、「女」、「有色人」という単純な主体におけるのではなく、「有色人の作家」、「女の作家」、「有色人の女」であったことは、重要ではあるがここではさほど問題にしない。ここで問題としたいのは、この人物が、「彼女」と呼ばれてしまったことである。さきほど、この人物が著者ミンハ自身であると推測したのだが、この人物が、著者ミンハによって「彼女」と呼ばれることによって、再び誰なのかわからなくなる。

このように、誰なのかわからないというような表現の技法が、ミンハの表象の特徴の一つである。

こうした表現の技法について、訳者である竹村和子は、「あとがき」の中で次のように述べている。

人称代名詞については、通例では三人称で語るというところに一人称が使われたり、その逆であったり、読むときに戸惑うことがある。おそらくこれは、自己と他者の境界を曖昧にし、抑圧者と被抑圧者を一元的な図式で捉えない著者の意図の所産であろう。また一段落があまりに長い箇所は、分節化（言語化）に対する抵抗と依存関係の両方を文体で示そうとしたものだろうし、一段落すべてがイタリック体（翻訳ではゴシック体）の箇所は、実験的な映画のように周りから独立した個人的・臨場

的な場面を挿入して、驚き、怒り、喜びといった表現の手触りを伝えようとしたのだろう。（ミンハ二二五三頁）

人称代名詞が読み手を裏切るのは、抑圧者と被抑圧者（弱者と強者）を一元的には捉えないというミンハの意図のあらわれであるという。一段落が長いのは、言語化に対する抵抗と依存の両方を、文体で示そうとしたのであり、一段落すべてが強調されているのは、その文脈から独立した場面を挿入することで、表現の手触りを伝えようとしたのだと竹村は言う。

ここで三つ目に挙げたイタリック体については、この著書の「うたい文句」が参考になる。この著書のカバーには、著書について次のように紹介されている。

アカデミックな人類学やフェミニズムの枠を破って〝男から盗んだ言葉〟の枷をはずし、想像力あるれる言葉や語りの引用と著者自身による映像のコラージュを織り込みながら、文化をめぐる複数の問いを交差させる試み、注目の俊英、ベトナム女性映像作家による、新しい思想の予感に満ちた書。

ここに示されるように、この著書には、ところどころ映像作品の一場面が写真と、引用等によって挿入されている。読者に対して想像的に文脈をつくらせる、本文の流れに逆らうように、ある映像作品の一場面が挿入されるのである。映像のコラージュが織り込まれるのと同じように、イタリック体の箇所は、表現の手触りを伝えるために仕組まれた技法であるととれる。

弱者の思いを読者へと伝えるために、ミンハが用いた実験的な技法を批判することは、筋ではないのかもしれない。しかし、この表現技法に問題がないといえるだろうか。

先に指摘したように、表象化の問題は、「彼女について語ることによって、私が何をしていたのか、しようとしていたのかというところを問うていくこと」にある。この著書を書くことで、映像のコラージュで示すことで、ミンハは何をしていたのか、しようとしていたのか。

竹村に依拠するならば、弱者と強者とを一元的に捉えてはいかないのだと主張した、または、言語化に対する抵抗と依存関係を見抜いていることを示した、もしくは、コラージュを使うことによって表現の手触りを伝えることができるのだと仮設していることを示したとのだと言えるかもしれない。

しかし、岡による自問とレイ・チョウによる「神話作用」への着目を参考に、権威的であると自責しながらも、私がミンハの表象を問題化したい。

ミンハは、自分こそが弱者であることを主張していたのではないか。ミンハはその著書、映画において、「私は弱者である。私は女性・ネイティヴ・他者である。」と意味しているのではないか。トリプル・バインドにある弱者を三人称で語ることによって自分ではないように想定し、その想定した「彼女」に同一化して「彼女」を語る。ミンハの語りは、弱者の痛みの分有を賭けた「証言」となる以前に、自分自身が弱者であることを主張し、弱者と名づけられた強者のア

イデンティティを確立しようとしていたともとれるのである。

レイ・チョウを借りれば、移民にとっての「故国」のように手の届かない存在として、ミンハの表象はミンハの著書を、映画を、手の届かないものとして提示しているように思える。さらに、ミンハの著者、映画では、曖昧さ、空白が意味し、沈黙が語っている。小説ならば、出来事（俗的でとるに足らない女性的な出来事、そんな出来事の中に抑圧が見えるような出来事）の描写の理由を、道徳的な教訓によって正当化せねばならない。そこを映画は空白にできる。「リアル」に見せるために描写したのだというアリバイを与えられるのだとレイ・チョウはいう。転じてそれは、空白によって教訓を押しつけているといえるのではなかろうか。ミンハは技法によって空白をつくり出している。ミンハの試みは、道徳的な教訓を、言葉を並べて諭すのではなく、空白によって解釈を招かせているのである。

ミンハの主張は、もはや対話的などとはいえない、主張を批判する者を「弱い者いじめ」と否定して「耳を貸さない」、つまり強者の「モノローグ」になってしまっているのではないだろうか。

五、ミンハを理解する人

ミンハの試みた方法は、弱者の「語り」という一つの「物語」を構築するのではなく、むしろ築かれる「物語」をその都度壊していくという方法であった。例えば、冒頭の「詩人、作家」とは誰なのか、著者ミンハ自身であるという「物語」をいったんは築くが、「彼女」という表現によって壊されてしまう。ミンハが試みたのは、ミンハの表象を理解した人たちの理解を壊していくことだったのかもしれない。

それを鷲田清一（二〇〇二）はバルトの論に依拠しながら、「モード」という観点から説明している。

> 過去の拒絶（先行していたモードすなわち自分自身の過去の拒絶＝引用者注）、過去との断絶が、わたしたちの意識を現在という時間の〈際〉に集中させる。「いま」というものを先鋭化する。そこでモードという現象は、視点と終点、発端と結末をもつ「強い」物語を背負っているふりをするわけだが、実際にはそのような意味の連続をなぞったり、「進化」ないしは「進歩」するわけでなく、モードはただただ「変わる」だけである。
>
> （鷲田二〇一頁）

「モード」はただ、変わるだけで、進化も進歩もしていない。また鷲田は別の箇所で、「モードの展開にはなんら「弁証法的」な発展はないのである。重要なのは、たえず何かを作っては壊すという身ぶりなのである。」（鷲田二〇四頁）と述べている。鷲田が注目しているのは、「何かを作っては壊すという身ぶり」である。それは、ミンハの試みでもあった。

しかし、ただ「変わる」だけの「モード」に対し、その受信者は「強い」物語を見るように、ミンハの試みに対し、受け手は個々さまざまな「物語」を見ようとする。鷲田（一九八九）『モードの迷

宮』は、「わたし」が「わたし」であるために「物語」を希求してしまう「迷宮」を論じているといえる。なぜ「物語」を作ってしまうのか、ここでは詳しく論じないが、ミンハの表象化だけに問題があるのではなく、その受け手が作ってしまう「物語」の問題性をここでは指摘しておきたい。

さらに、受け手によってつくられてしまう「物語」は、いかにして壊されるのか。この点については、森美智代（二〇〇一a）において、受け手が「物語」を作ってしまうことを「他人」化と呼び、「他人」化を度々覆す「対面」の可能性を示唆した。「対面」によって現前する「他者」は、受け手がつくる「物語」を壊してしまう存在として出会われる。ここに、受け手自身の「物語」が見直される可能性を指摘することができよう。

六．おわりに

ミンハの考察を進めることで明らかになったのは、弱者自身による弱者の表象化が、強者の表象化となってしまう働きである。自分が弱者であると語ることは、自分自身のアイデンティティを確立していくことになる。自分は弱者であるというアイデンティティは、「耳を貸さない」強者のアイデンティティとなっていく。

もし、このように弱者を表象する自分の目の前に、実際の弱者がいたとしたらどうだろうか。自分こそが弱者なのであると言われた実際の弱者は、自分が弱者であることを否定されるか、自分の方がもっと弱者であると主張するかしかないだろう。しかし、弱者の度合いなどというものが測れるはずもない。

今回考察した弱者の表象は、国語教育という領域においては、授業を記述するという問題を考察するために欠かすことのできない考察だと私はとらえている。ある授業を「この授業はこのようであった」と表象化する際、自分が「西洋人」であることを確立するように（岡真理）、「封建中国」をメロドラマ化して語るように（レイ・チョウ）、授業の記述は、自分自身が気づいてもいないような何かを主張してしまうのである。それによって、思いもよらず、誰かに対する強者となってしまっているかもしれない。また、授業やその記述を受けとめる受け手も、それぞれの「物語」を希求していってしまう。

では、どのように授業を記述したらいいのだろうか。詳しい考察は次の機会に譲りたいが、記述に関して考察を進めているエスノメソドロジーにおける試みについて指摘しておきたい。森美智代（二〇〇一b）では、記述におけるエスノメソドロジーの可能性について考察している。「自明性を疑う」というエスノメソドロジーの基本スタンスは、自明的になされてきた授業記述を再構築していく衝動力になりうるだろうと私は考える。

授業の記述はどのようにしていくことが望ましいのかを考えていくことが今後の課題である。

また、弱者という視点からのとらえ直しによって、研究者—実践者の関係や、教師—学習者の関係のとらえ方は変化させていかざるを得なくなる。トップ・ダウン、ボトム・アップといった概念ではもはやとらえられないからである。同様に、学習者の目線に「おり

てくる」という表現ももはや適切ではない。教師―学習者関係において、学習者は弱者であり、語ることが困難であることは知っておかねばならない。しかし、教師が弱者である、と表象することも可能である。無邪気な学習者たちの視線に晒される弱者として、教師を位置づけることもできよう。弱者としての教師が実践する授業、その記述として、授業の記述をとらえ直すことはできないだろうか。あらゆる状況、不慮の出来事に迅速に対応でき、ある種自信を持った強者としての教師ではなく、日々の学級運営や授業実践に自信を持てないながらも、何とかしたいと踏ん張っている教師だからこそ可能な授業実践、授業記述があるように私は思う。

さらに、私自身、「話すこと・聞くこと」の教育を考察していくことを目指していることから、弱者の表象に関する考察と、「話すこと・聞くこと」の教育とを関わらせていくことも、今後の課題として挙げておきたい。今回、ミンハの試みに対する違和感をその表象の技法に着目することで明らかにしていったが、果たしてこれは、ミンハの伝えたかったことを聞いたことになるのだろうか。ミンハの痛みを背負うことができたのかというと、決してそうではない。痛みを背負うことができなかった以上、聞いたことにはならないだろうと私は考えている。では、どうすることが「話すこと・聞くこと」を実現したことになるのだろうか、これが課題である。ミンハの技法に乗っかって、弱者を主張するミンハに自分自身を重ねるだけでなく、また一方ではミンハの痛みを背負うような「話すこと・聞くこと」とは、どのような行為なのだろうか。今後追及していきたいと考える。

引用文献

太田好信（一九九九）「討議　スピバックあるいは発話のポリティクス」、『現代思想』一九九九・七、№27―8、青土社。

岡真理（一九九九）「彼女の『正しい』名前とは何か」、『現代思想』一九九九・一、№27―1、青土社。

姜尚中編（二〇〇一）『ポストコロニアリズム』、作品社。

トリン・T・ミンハ（一九八九）『女性・ネイティヴ・他者　ポストコロニアリズムとフェミニズム』、竹村和子訳（一九九五）、岩波書店。

森美智代（二〇〇一a）「「語られる身体」としての「聞くこと」―「聞くこと」の学びの生成―」『国語科教育』第四九集、全国大学国語教育学会。

森美智代（二〇〇一b）「「学び」としてのエスノメソドロジー―その限界と可能性―」、『滋賀大学大学院　教育学研究科論文集』第四号、滋賀大学大学院教育学研究科。

レイ・チョウ（一九九五）『プリミティヴへの情熱　中国・女性・映画』、本橋哲也・吉原ゆかり訳（一九九九）、青土社。

ロラン・バルト（一九五七）『神話作用』、篠沢秀夫訳（一九六七）、現代思想社。

鷲田清一（二〇〇二）『時代のきしみ　〈わたし〉と国家のあいだ』、TBSブリタニカ。

鷲田清一（一九八九）『モードの迷宮』、中央公論社。

（広島大学大学院）